校長室だより～燦燦～ №２３２

一隅を照らす

2020.11.13

「一隅（いちぐう）を照らす」あまり聞かない言葉かもしれない。天台宗の開祖である最澄が残した言葉である。正確には「一隅を照らす、これ則ち国宝なり」となる。

一隅とは、片隅という意味である。すなわち、この言葉は、片隅の誰も注目しないような物事に、ちゃんと取り組む人こそ尊い人だという意味である。誰もが注目するような表舞台で派手に活躍するばかりが尊いわけではない。一人一人が自分のいる場所で一隅を照らしていくことこそ、私たちの本来の役目であり、それが積み重なることで世の中が出来上がっていく。

私たちは、すぐ派手なこと、目立つことに目を奪われてしまう。しかし、どこかの片隅で誰の目にも止まらないようなものに目を向けていくことも、同じように尊いことなのだと考える。

大きく世界を変えようとするのではなく、まず目の前のこと、今自分にできることを一生懸命やっていく。そうやって一人一人が灯す小さな光がやがて大きな光となる。そんな気がする。みんなが気がつかないような片隅で社会を照らしているような人が、国の宝なのである。たとえ注目されなくても、自分が置かれた場所でベストを尽くすことが大切である。

「一燈照隅（いっとうしょうぐう)」という言葉もある。最澄が唐から持ち帰った言葉で、正確には「一燈照隅、万燈照国」という。「最初は一隅を照らすような小さな灯火でも、その灯火が十、百、万と増えれば、国中を明るく照らすことになる」という意味である。

一人一人が自分が置かれている環境で精一杯努力することが、組織全体にとって最も貴重であるという教えである。

いまだに記憶に残っていることであるが、２０１９年１２月４日、福岡市出身の中村哲医師がアフガニスタンで凶弾に倒れた。国際ＮＧＯ「ペシャワール会」現地代表として、荒廃したアフガニスタンとパキスタンで市民とともに人道・復興支援に尽くした中村さんが、好んで使ったのが「一隅を照らす」という言葉である。今いる場所で希望の灯をともす。中村さんの生き方そのものであった。

梁川高校の先生方と一緒に仕事をしていると、「一隅を照らす」という言葉が浮かんでくる。決して派手さはない。目立とうともしていない。ただただ目の前の生徒たち一人一人のことを考え、一人一人の将来のことを思い、日々着実に仕事をしている。

生徒たちも、先生方から何かしらの影響を受けるはずである。近い将来、社会に出て、職場や地域社会などでリーダーとして活躍する人もいるだろう。一方、組織の先頭に立つわけではないが、自分の持ち場に責任をもち、地味ながらも着実に取り組み、結果を出していく人もいるはずである。こういった人たちが、立派に社会に貢献できる人、地域に貢献できる人材なのではないか。

ぜひ“一隅を照らす人”になってほしい。そして、梁川高校は、一隅を照らす人を育てる学校でありたい。